

『龍星の羅針盤』の推薦文

『迷い迷いて螺旋の道を』

東京大学名誉教授 矢作直樹

本書は、濁川先生のこれまでの人生で悩み迷いが生じた時に心の支えになり羅針盤になって進むべき方向を示してくれた物語のオムニバスです。本の構成は特徴的で、以下2つの章にまとめられています。2章『長い旅の途上』では、ご自身が進む方向を定められて人生の旅路を確たる足取りで歩まれているのですが、それに至るまでの長い心の遍歴を、1章『揺れる』にてご自身の学びを交えながら考察されています。

濁川先生は、体育学部で一生涯の恩師栗本関夫先生と出会われました。そして体育学の大学院まで出られて、9年間私立大学で体育学の教師、研究者として働かれました。そのおかげで1988年に立教大学一般教育部助教授に採用されました。

ここでやがて先生に転機が訪れます。はじめは、健康科学や身体科学の研究をされていたのですが、ご自身の息子さんの「心の闇」を契機として研究対象が靈性にシフトしていかれました。まさに息子さんが父親である先生に生きていく上で最も大切な靈性に関心をもち、目を開かせる役目をなされてきました。

息子さんの問題から目を背けずに真摯に向き合い、ともに考え悩み苦しみ、そしてその果てに光を見つけてその方向に進んでこられたことが本書に語られています。人生で最も堪えるのは身内の不調です。生来、優しく従順だった息子さんが中学生の頃から徐々に様子が変わり、反抗するようになり、そして大学生時代にととう引き籠りになってしまいました。そこから先生ご自身が心のブレイクスルーをし、息子さんのおかげで今の先生があることに気づかれたのです。

先生は語られています。「自分は本当に無力だ、ということをお願い知らされました。そして、世の中には深い悩みや淵があり、もがき苦しんでいる人がいるんだ、という事実を身をもって体験しました。以降、人の悩みや弱さに思いを馳せ、出来る限りそれに寄り添おうとする自分がいます。以前より優しく、そして謙虚になつた自分がいます。すると、世の中の全ての存在の見え方が少し変わりました。上手く言えないのですが、簡単に言うと「愛おしく」見えるのです。人はもちろんのこと、傍らにある名もない花や樹や鳥たちまでがとても愛おしく思えるのです。」と。先生がその境地に達したときに、息子さんも変わられました。

そして、つい最近、母上様が他界されました。それを感謝の気持ちで受容されたことが述べられています。

本書の帰結は、「感謝して全てそのまま丸ごと受け入れる」です。

さて、先に答えを申し上げてしまいましたが、そこに至るまでの遍歴が実に様々

で、一つひとつのエピソードがそれだけで物語になっています。

はじめに帰結点の一つである、靈性の理解への問いかけ、すなわち魂の永続性に思い致せば人生に起こる様々な出来事を受け入れられるという信念と、その信念が揺らぐことの繰り返しがご自身の人生だったと正直に告白されています。

そして、その信念の裏打ちを求めて、様々な人の考えや、催眠誘導による過去世退行、交霊、など広範なジャンルに踏み込んで思索を深められました。特に本書のモチーフになる星野道夫と龍村仁を人間が自然と調和を保って存在する上での確たるビジョンの羅針盤とし、宮澤賢治の『雨にも負けず』を唱える中で、先生が長年奉職された立教大学の設立者ウィリアムズ主教の「道を伝えて己を伝えず」がご自身の役割だと思われられました。

しかし、その良き「道を伝える」人になるには道への深い理解、つまり腑に落ちている必要があります。先生は、本書でも明らかにされているご自身の「不思議な体験」や、若い頃からの登山・スキーやカメラをはじめ大自然での豊かな経験を通

じて自然との共生を実感されていたからこそ、その思索を深め、良き「道を伝える」人としてあり得たのだと思います。

濁川先生の様々なジャンルにおけるエピソードが満載で興味が尽きません。読者の方々が本書を読み終えた時に、オムニバスに共通する大自然の中での生活に、生きる喜びを知り、靈性を見出した著者とその感覚を共有されることと確信します。

にご先生への手紙

龍星の羅針盤を読んで

俳優 榎木孝明

にご先生へ

やつと先生の時代が、あえて仲間に入れてもらえるならば、私たちの時代がやってきますね。すぐそこまで靈性（スピリチュアリティ）を日常で語れる時代が来ているのに、今はその産みの苦しみの時代でもあります。

ウクライナ戦禍の目処は立たず、イスラエルとパレスチナの終わりのない戦いが続き、目を覆いたくなるような惨劇に心が痛みます。合わせて世界各地で起きる天候異変による自然災害。時代が大きく変わろうとしている今、その不安定期に入ったとすれば、世界中に様々な葛藤が溢れるのは通過儀礼的な出来事で、仕方のない

ことかもしれません。

でも間違いないすべては新しい方向に変わっていくでしょう。それは止めようのない宇宙の自然な流れだからです。私たちが直面している問題はどんな問題であれ、必ず終わりが来ると信じます。信じる事は、人に与えられた素晴らしい能力だと思えます。

時々、先生を羨ましく思います。それは靈性を語り、それを飯の種に出来ているからです。私のいる芸能の世界では、それを前面に出すといまだに仕事に影響があります。そちら系の人とのレッテルが貼られて仕事が限定的になるからです。それもうしばらくの我慢だと思えますが。

どうぞこれからも靈性豊かな人として私の数歩前を走り、範を示し続けてください。私もいつか併走出来るように精進したいと思います。

榎木孝明